

中学校における古典和歌教材について

—昭和二十四〜二十八年—

山宮 美 萩

はじめに

前稿「小学校低学年・中学年における古典和歌教育」^①、「小学校高学年・中学校における古典和歌教育」^②において、平成二十七年版の小学校第一学年から中学校三年生までの古典教材を整理し、特に古典和歌について単元で取り上げられる和歌の傾向や単元の問題点を示した。

本稿では戦後最初に発行された中学国語の教科書のなかから、現在も使われている出版社を考察対象とし、古典和歌及び関連する俳句・短歌の韻文教材を含め、その単元内容や、単元目標について整理する。並行して平成二十七年版では見られない特徴を明らかにし、この時代にはどのような工夫がされていたのかについての考察に及ぶたい。

本稿で扱う対象は、昭和二十四年に学習指導要領（試案）が出版されてから、各出版社が最初に発行した教科書を対象としており、出版社ごとに発行年が異なる。以下参照。

東京書籍・昭和二十六年発行／監修 柳田国男／編集委員 岩

淵悦太郎、大藤時彦、手崎政男、中島武雄、増淵恒

吉、鎗田亀次、東京書籍株式会社編集部

学校図書国語編・昭和二十八年発行／監修 志賀直哉、辰野

隆、久松潜一、池田亀鑑／編集委員 中村通夫、山口

正、西尾光一、森岡健二

学校図書文学編・昭和二十六年発行／監修 久松潜一、池田亀

鑑／編集委員 長谷章久、竹下数馬、中島馨、佐山祐

三、島本恵也、森本元子

学校図書言語編・昭和二十六年発行／監修 辰野隆、久松潜一

／編集委員 戸坂康二、吉田澄夫、渡辺修

三省堂・昭和二十五年発行／編集委員長 金田一京助／編集委

員 佐伯梅友、竹田復、木村新、金田一春彦

教育出版・昭和二十八年発行／監修者 藤村作／編集者 片岡

良一、古田披、小川俊一郎、三尾砂、森山重雄、安良

岡康作

光村図書文学編・昭和二十七年発行／著作者 垣内松三／編集

委員 安藤新太郎、石森延男、栗原一登、輿水実、八木橋雄次郎

光村図書言語編・昭和二十七年発行／著作者 垣内松三／編集

委員 安藤新太郎、石森延男、栗原一登、輿水実、八木橋雄次郎

学年別に、教科書から韻文教材の内容を抽出し、採録されている作品や単元の目標を比較する。古典和歌については、作品も併せて引用し、各社の傾向や単元設定などを比較する。

なお、教科書の引用については本文および作者のみとし、読み仮名は省略した。また古典和歌の引用については出典と歌番号を補った。⁽³⁾

一、中学一年生

学校図書

中学校一年生に関しては、学校図書の言語編にのみ俳句を扱う単元が見られたが、他の出版社では韻文教材を扱う単元は見られなかった。

学校図書の言語編⁽¹⁾では、「俳句の世界」という単元で、中村草田男の松尾芭蕉研究として、芭蕉の俳句五句が解説文とともに取り上げられていた。目標では、「作者の深く鋭い観察がどのようなことばで表わされているかについてしらべよう」、「読後感の書き方について話し合い、要点を書きとめておこう」など鑑賞に重点をおいた

単元設定になっている。

例として、「古池やかはす飛びこむ水の音」では、

「かはず」が春の季題。この句は、あまりにも有名で、俳句というと世間の人はすぐに「ああ、古池や……というやつか」などというくらいで、皆さんも、今までに何度も聞いて知っているでしょう。わたくしも、幼いときから何度も聞かされ続けたので、なれっこになってしまつて、非常にいい句なのか、それほどでもないのか、一時はよくわからなくなっていました。近ごろはまた、はつきりと、非常にいい句だと思つていきましたが、ました。(中略)それは一匹のかわずが、その古池へ飛びこんだ音なのだということが芭蕉にはわかりました。その時です。その事実と芭蕉が受けとつた不思議なくらいに深い気持とが、思わず一つになってこの句ができたのです。その不思議なくらいに深い気持とはどんな気持でしょう。

というような解説文が、句ごとに約二ページにわたつて書かれている。言語編というだけあって、五句のみであるが解説文がとても丁寧な書かれており、俳句を今後鑑賞する際に役立てられる単元といえる。

二、中学二年生

東京書籍

東京書籍は、中学二年上巻に「作歌の体験」が設定されている。

この単元の前文には「ものの真実をとらえ、まことの美をつくり出すために、多くのまじめな芸術家たちは、血のにじむような苦心と作業をかさねる。芸術家たちのこの心を味わおう。」というように、どのように短歌や詩を作ればよいかという視点ではなく、北原白秋自身がどのように短歌や童謡を創作していったのか、その過程や推敲の仕方を詳しくみていくという流れだった。

たとえば、「蝶」という題材では、

黄の蝶の林に住むはかそけかり落葉松も芽ぶきそめにし

という短歌に対して、初二三句の訂正版を九つ、四五句の訂正を三つ挙げている。初二三句の訂正版を挙げると、

黄の蝶の来たるに会へば山原や

黄の蝶のうつつなく飛ぶ山ふかし

黄の蝶のかそけき飛びもうつつなし

黄の蝶の羽ぶりがそけく飛ぶ見れば

黄の蝶の奥所（深处）に飛ぶぞうつつなき

黄の蝶の住みつつ飛ぶぞうつつなき

黄の蝶の住みつつ飛ぶぞかそけかれ

黄の蝶の林に住むはうつつなし

黄の蝶の林に住むはかそけかり

の九つで、「信州の追分から浅間山のおもとへはいったからまつ
の林、その早春（四月ではあるが）、霧雨が細かに渡って、土の湿り
がよくにおった。からまつの新芽の細かさ、その緑も遠くは金粉の
ようにぼうつとしていた。黄いろいちようがひたひたと薄明りを飛
ぶ」という作者がみた風景を様々な角度からとらえなおしている。
それぞれが、「私はその林の奥深く探り行って、その蝶に、心を、
感覚を打たれた」ことをどう表現するのが良いのかを作者自らが推
敲している。

そのあとには同じ題材で、

ちようちよう

ちようちよう、ちようちよう からまつ山は まだ寒い。ちら

ちら飛べよ。

ちようちよう、ちようちよう、三月四月、霧雲はやい。ぬれぬ

れ飛べよ。

ちようちよう、ちようちよう、からまつ原は もう芽がもえ

る。こぶかく飛べよ。

ちようちよう、ちようちよう、ちんころぐさも 林に赤い。大

きく飛べよ。

という童謡を作り、北原白秋自身の考える「自然観照の正しさ」に
ついて解説をしている。ここでは、

童謡の根本となるべきものは、やはり本格的な詩歌の持味でなけ

れば、単なる幼がりや、俗悪童謡に墮する。短歌といひ童謡といひ、形式の相違こそあれ、それらが同一の作ならば、かおりも気品もひとしく流通するはず（中略）見、知り、歌う時に、そのままの心の状態において、詩にも歌にも童謡にも流通するところはただ一つであるべきである。

として、北原白秋の歌人らしい言葉がある。

このあとには、題材の異なるいくつかの短歌や童謡が見開き四ページにわたって引用されている。この単元は、北原白秋の童謡と短歌を基に、内容を吟味したり、短歌と民謡、琴歌調の形式の違いを話し合い、自分の詩や歌を発表して批評し合おう、という「学習のたすけ」が設定されている。手本である作家の創作過程や思考を学ばせるという点がこの単元の特徴といえる。

学校図書

学校図書の国語編では、二年生下巻の「I 詩と短歌」という単元のなかで、小単元一、二に詩を取り上げ、「三 歌いたい心（谷馨）」で現代短歌十九首とそれぞれの鑑賞文、「四 柿の落ち葉」では鑑賞文がついていない現代短歌二十首が取り上げられていた。「三 歌いたい心」では、前文で短歌と文章を比べてどのような特徴があるか、短歌をうたうときの「心」に注目し説明している。ここでは、

一 短歌は文章とどこが違うか、形式内容について比べてみよ

う。また短歌を普通のとときとも比べてみよう。

二 リズムとはどんなことか調べてみよう。そして短歌におけるリズムの役割を考えてみよう。

三 例歌を読み味わったうえで、さらに新しい歌を味わってみよう。

四 短歌を作ってみなで批評し合ってみよう。

五 好きな歌について感想を述べ、話し合おう。

の五つの問題が設定されている。「三 例歌を読み味わったうえで、さらに新しい歌を味わってみよう。」の「例歌」とは「三 歌いたい心」の十九首を指す。たとえば、鈴木光子「窓下の道にまきたる貝殻を踏みて雨夜を人の遠のく」では、

雨夜のさみしい感じがよく出ています。歩きいいように、窓下の道に貝殻がまいてある、それをさくさく踏みながら、だれか知らないが、雨ふる中を遠くまで行く。作者はじつと耳を澄ませて、その遠くまで行く足音を聞いているのです。「しんとした調子」で、静かに歌った、品の良い歌だと思えます。なにかさみしい音楽でも聞いているような感じがしてくるようです。

というような鑑賞文が付してある。ここでの鑑賞文を、「四 柿の落ち葉」の短歌を味わうときのお手本として活用できる単元内容となっており、鑑賞文から「どのように鑑賞すればよいか」を学ぶこ

とも含めた学習の流れが読み取れる。

学校図書(7)の文学編では、二年上巻に「俳句の作り方 味わい方」という単元が設定されている。内容は、俳句の作り方（規則や季題について）、味わい方（よさやおもしろさをどのように感じるか）を、見開き八ページにわたって例句を示しながら丁寧(7)に説明している。単元目標として、

【問題】

- 一 「俳句の規則」を読んで、これを、まとめましょう。
- 二 季題、切れ字、季重なり、三段切れなどのことばが説明できるようにしましょう。
- 三 「俳句の味わい方」を、一句一句についてよく読み、他の句を味わうときの参考にしましょう。
- 四 よい俳句とは、どういうものを言うのでしょうか。
- 五 俳句を作る上に、規則とは別に、たいせつなことはどんなことか、話し合みましょう。
- 六 季題のない俳句もありますが、調べてごらんください。
- 七 「夏嵐」の俳句を一句一句味わいましょう。みなさんの考えを発表しあうと、なおおもしろいでしょう。
- 八 「夏嵐」以外の句も味わってみましょう。つぎに、各自で俳句を作り、発表しましょう。

の八つが設定されていた。俳句を創ることを最終目標として、きちんとその構造を理解できるように丁寧な単元内容となっている。

平成二十七年版学校図書『中学校国語3』では、「俳句表現に込められた思いを捉える。俳句特有の表現を捉える。」という目標はあるものの、規則に関しては、簡潔に説明している部分が多い。加えて、「二 季題、切れ字、季重なり、三段切れなどのことばが説明できるようにしましょう。」のような「季題」以外の用語について学ばせたり、「四 よい俳句とは、どういうものを言うのでしょうか」のように俳句の良し悪しや本質に目を向ける内容はみられない。この点においては、学校図書の特徴といえる。

学校図書以外にも俳句や短歌の作り方を丁寧(8)に説明している単元が昭和二十四～二十八年の教科書には多くみられる。これは『学習指導要領（試案）』「第三節作文 十、第二学年学習目標」にある、「文学的作品を個性に応じてどんどん書いていく」によるものと考えられる。

三省堂

三省堂では、二年上巻で「短歌十首」「短歌の作り方」という単元が設定されていた。「短歌十首」は解説がなく、あとにある「短歌の作り方」の単元とあわせて学習することで成立する作りになっている。「短歌の作り方」では、文章（散文）と比較しながら短歌の特色について述べられており、「短歌は『歌うもの』であり、文章は『話すもの』『述べるもの』です。」というように短歌を作る上で大事なものは、「歌いたい心で、感じたことを、五七五七七の形で表現することである」と書かれている。ここから、「短歌十首の中ではいちばんいいと思うものをみんなで選」んだり「自由詩と定型詩

とは、どう違う」のかや、「自分たちで作った詩や短歌で文集を作り、みんなで批評」しあうという目標が設定されていた。

「短歌は『歌うもの』』という文言のほかに、

短歌は、だれでも作れるものです。別に、むずかしい規則はありません。たゞ、五七七七七と、五つの句から成り立っていないければならないという、形の上の約束があるだけです。

この約束だけは、守らぬと、短歌にはなりません。つまり、この規則の中に、短歌だけが持っている「調子」(調べとも言いまします。英語ではリズムとも言います。)があるわけです。こゝが、文章や詩や俳句などと違うのです。

という文章がある。古典和歌はなかったものの、三省堂では「短歌とは何か」を生徒に深く考えさせる単元づくりがされているといえる。

教育出版

教育出版では、二年上巻の「⁹⁾詩歌の鑑賞」という単元で、近代短歌や、近世・近代俳句の鑑賞をする単元が設定されていた。ここでは、近代短歌が二十首、俳句が十九句取り上げられているが、どちらも解説や語注はなかった。この単元では、

一 短歌や俳句は、短いから、みんなノートに写して、何回も声を出して読んでみたり、人の読むのを聞いてみたりする。その感じをたいせつにして、話し合う。わからぬこと

ばは、辞書で調べてみよう。

二 学校図書館で手分けして、作者の伝記や時代・生活・背景・作風などを調べて、それをまる写しのまま発表するのはやめて、自分のことばに直して言う。そして、その歌なり、句なりがどんなときにできたかを話し合う。

三 短歌・俳句・詩と順々に口語に書き直してみよう。

四 短歌・俳句をもとにして、その情景や感想なども加えて、長い文章にしてみる。「落葉松」や「稲作挿話」は、物語ふうにしてみたりするのもおもしろいであろう。

五 短歌・俳句・詩などを作って発表する。

という五つの目標が挙げられている。二に関しては、文学史的観点と調べ学習を取り入れており、三・四・五に活かしやすい目標設定がされている。近代の文学史を知りつつ、俳句についての多角的なアプローチをすることをめざした単元ではないかと考えられる。

また、他の出版社との違いは、二の目標も特徴的で面白いが、口語訳を考えさせたり、短歌や俳句の情景や感想を通して「長い文章を書く」という活動目標である。鑑賞と文章化する活動を両立できるようにになっており、さらに発表するということを含めると、人に「わかりやすく伝える」ことを生徒に考えさせることにもつながられる。

光村図書

光村図書は、二年生では韻文教材を扱う単元が見られなかった。

三、中学三年生

東京書籍

東京書籍では、三年上巻に「現代短歌」の単元、三年の下巻で古典和歌の単元が設定されていた。

三年上巻では、現代短歌を三十首取り上げている「ふちの花ぶさ」という単元が設定されている。「長い伝統の上に立った短歌も、明治二十五年ごろから革新期にはいり、現代短歌としての新しい花を開いた。それらの花はどんな色合や姿を見せているのかを、次の歌について読みとろう。」という前文があり、取り上げている短歌に解説や語注などはなかった。「学習のたすけ」として、

- 一 この課の中の次のような歌について話しあおう。
 - 1 深く観察してある歌
 - 2 大きい景色をよんだ歌
 - 3 真情のこもった歌

二 次の歌人が歌のよみ方においてどんな違いを見せているか、考えてみよう。

- 1 子規と晶子
 - 2 左千夫と啄木
- 三 自然をよんだ歌と生活をよんだ歌のちがいを考えてみよう。
 - 四 自分の好きな歌を選んで感想を述べあおう。
 - 五 普通のかなづかいとちがった書き表わし方をしてるところを抜き出してみよう。

があるのみだった。一・二のように、生徒自身が歌の分別をしたり、異なる作者・作品を比較するという活動は、平成二十七年版ではあまり見られない。取り上げた三十首を教科書側がえてグループ分けせず、生徒自身で短歌を比較させたり、考えさせるというところに特徴があるといえる。

三年下巻では、斎藤茂吉の『万葉秀歌』を引用しており、和歌は三十首取り上げられていた。『万葉秀歌』は、斎藤茂吉が『万葉集』のなかから約四百首を選び、解説と鑑賞文を付したものである。また、後半の二首は、島木赤彦『万葉集の鑑賞及び其批評』からの引用である。

この単元は、「和歌の鑑賞」というよりも、斎藤と島木の批評文から五つの和歌がどんな特長を持っているかを読みとらせることを中心としていた。二年の上巻にあった「作歌の体験」の単元と同様に、斎藤茂吉と島木赤彦が、どのように古典和歌を鑑賞しているのかをまず知ることから始める。以下、本文から引用する。

斎藤茂吉「万葉秀歌」による（和歌三首）

柿本人麿 淡海の海夕波千鳥なが鳴けば心もしぬにいにしへ思
ほゆ (巻二・二六六)

山部赤人 み芳野の象山の際の木末にはここだも騒ぐ鳥の声か
も (巻六・九二四)

山上憶良 憶良らは今はまからむ子なくらむその彼の母もわを
待つらむぞ (巻二・三三七)

島木赤彦「万葉集の鑑賞及び其批評」（和歌二首）

志貴皇子 石はしるたるみの上のさわらびのもえいづる春になりけるかも
(巻八・二四一八)

湯原王 吉野なる夏実の川の川よどこにもぞ鳴くなる山かげにして
(巻三・三七五)

たとえば『万葉秀歌』の山部赤人「み芳野の…」の解説文では、

この歌は下半に中心が置かれ、「ここだも騒ぐ鳥の声かも」に作歌衝迫もおのずから集注されている。この光景に相對したとかいていしてみても、「ここだも騒ぐ鳥の声かも」とだけに言いきれないから、この歌はやはりすぐれた歌で、赤人の傑作の一つであろう。

というように、難解ではあるもののなぜこの和歌が評価されるのかを示す文章になっている。また、『万葉集の鑑賞及び其批評』での志貴皇子「石はしる…」では、

たんたんたる現われにおのずから春の心がしみ出いて、いかにも快く心持のおった歌である。(中略)その写生がこのように単純にいつているのは、感応の心が純粹に働いたからである。第一句より第五句まで連続して、層々勢いをなしつつ一筋とおっている句方が、その純粹な感応と相通じているという観がある。この歌、優に万葉集中の秀逸である。

という解説文が付されている。「学習のたすけ」として、

一 それぞれの歌を読んでそらで言えるようにしよう。

二 次のことばについてそれぞれの意味を調べてみよう。

(心もしぬに／いにしへ思ほゆ／木末／ここだ／まからむ／わを待つらむぞ／たるみ／なり／にけるかも／かもぞ鳴くなる／山かげにして)

三 この文章は、五つの和歌のどんな特長について述べているか、話し合おう。

四 できたら万葉集の他の歌を読んでみよう。

の四つがあり、特に、志貴皇子の和歌が「万葉集中の秀逸」と評されている部分においては、平成二十七年版では見られない書き方であり、「学習のたすけ 三」でなぜそう評価したのかを生徒同士で話し合うような活動が期待できる。

学校図書

学校図書の国語編では、三年上巻で「俳句の作り方」、近代俳句を取り上げた「ひばり」、『古今和歌集』『新古今和歌集』の単元があり、三年下巻で『万葉集』を取り上げた単元が設定されている。昭和二十四～二十八年に発行されている出版社五社のなかで、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の三つを取り上げているのは、学校図書国語編の三年上下巻のみだった。

三年上巻では、「俳句の作り方」という単元で近代俳句を扱い、そのあとに「古典入門」として『古今和歌集』『新古今和歌集』が設定されている。

「俳句の作り方」では、俳句の成立についての文学史的説明があり、俳句のルールについての説明（形式、季題・切れ字・季重り・全体の統一感）が見開き八ページにわたって書かれたあと、「ひばり」という単元で「みなさんの年齢のかたが、鑑賞するのにふさわしいよい句」として俳句十四句を鑑賞するという流れになっている。

「俳句の作り方」の単元では、

- 一 俳句は和歌からどのようにして生まれたか、簡単に言ってみよう。
- 二 俳句の規則を簡単に箇条書きにしてみよう。
- 三 切れ字を二つ使うこと、季重り・三段切れ、などはなぜ避ける必要があるのだろうか。
- 四 季題はなぜ俳句で大切なのか、考えてみよう。
- 五 俳句を作るときに、規則とは別に、どんな心がけがたいせつだろう。
- 六 できれば俳句を作って、みんなで批評し合ってみよう。

の六つの目標があった。ここでは最終目標として俳句の創作があるものの、それよりも「俳句の仕組み」とはどういうものかを生徒がきちんと言語化できるようにすることに重点がおかれているように考えられる。特に、三、四、五に関しては発問のレベルが高度であ

り、作品を鑑賞する前に「俳句で大切なこと」について考えさせる点が特徴である。

「ひばり」という近代俳句を取り上げている単元は、十四句引用されているが、解説文はなく、「俳句の作り方」で習った鑑賞方法を実際に試す単元として設定されていた。目標としては、「一 それぞれの句の季題と、その表わす季節を調べよう。」「二 好きな句について評釈文を書いてみよう。」という二つだった。俳句の基礎をしつかりと学ばせ、応用として創作をするというプランがしっかりとした単元設定である。現行では、「ひばり」のように俳句を引用し鑑賞する単元はみられるものの、「俳句の作り方」のように俳句の成立から規則、作り方の手順をまとめて記している単元はみられない。

次に「古典入門」の『古今和歌集』『新古今和歌集』を扱った単元では、

これまでは、昔のことに慣れないために、物語の現代語訳や詩形の短い俳句の二、三を通じて、古典の世界の一部をうかがったにすぎないが、ここではその読み方を習い、直接内容を味わってみよう。そして、昔の短歌や随筆や狂言や漢詩を読み味わい、あわせて文語のきまりを学ぶことにしよう。

という前文があり、ここからいよいよ古典の内容が始まることを示唆している。「一 飛ぶ雁」として『古今和歌集』から五首、『新古今和歌集』から五首が引用されていた。

読人しらず 白雲に羽うちかはしとぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜

の月 (『古今和歌集』秋歌上・一九一)

紀 貫之 袖ひぢてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風や

とくらむ (『古今和歌集』春歌上・二二)

凡河内躬恒 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは

かくるる (『古今和歌集』春歌上・四一)

紀 友則 雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわ

きて折らまし (『古今和歌集』冬歌・三三七)

坂上是則 朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる

白雪 (『古今和歌集』冬歌・三三三)

藤原定家 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の

夕暮れ (『新古今和歌集』秋歌上・三六三)

藤原良経 人すまぬ不破の関屋の板びさしあれにしのははた

だの秋の風 (『新古今和歌集』雑歌中・一六〇)

西 行 心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の

夕暮れ (『新古今和歌集』秋歌上・三六二)

後鳥羽天皇 秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生

の月 (『新古今和歌集』秋歌下・五一七)

藤原家隆 霞立つ末の松山ほのほのと波にはなるる横雲の空

(『新古今和歌集』春歌上・三七)

二年下巻にあった单元「三 歌いたい心」で現代短歌を鑑賞文付
きで学んだ。三年生の下巻にある古典和歌に解説文がない理由とし
ては、二年生で学んだことを活かすために敢えて解説文を付けた

かったと考えられる。単元目標は、

一 これらの和歌からどんな感じを受けたか。さきに学習した
現代短歌の場合と比べて話し合おう。

二 最後が名詞で終わっている歌が多いが、これは表現のうえで
何か効果を上げているだろうか。またこのほかに表現上の
技巧と思われるものはないか、考えてみよう。

三 好きな歌を選んで評釈文を書いてみよう。

という三つである。特徴的なのは二で、これは、「和歌技法」に注
目したものであり、ストレートな表現や描写をする歌が多い『万葉
集』ではなく、技巧に富んだ和歌が多数ある『古今和歌集』『新古今
和歌集』を持つてきた理由がうかがえる。東京書籍では、『万葉秀
歌』『万葉集の鑑賞及び其批評』という二冊を起用したのに対し、学
校図書は批評文ではないものの、三年上巻で『古今和歌集』『新古今
和歌集』、三年下巻で『万葉集』というように、和歌集の特徴に応
じて教え方に変化をもたせていると考えることができる。

三年の下巻では、「古典の伝統」という单元に「東洋西洋を結ぶ
広い世界を視野に入れ、人間全体の文化の向上を考えるとときにも、
わたくしたちは日本の古典文学を忘れてはなるまい。」という前文
がある。ここに当時の古典文学に対する思想が表れているように思
う。

最初に久松潜一の文学史についての文章があり、奈良時代から近
代までの文学史について見開き四ページにわたって書かれている。

文学の種類や時代の変遷について細かく描かれており、

一 文学の種類と時代とを基準にして、作家・作品の一覧表を作ってみよう。

二 各時代の文学の特色を考え、さらにその時代の社会状態との関係を考えてみよう。

三 日本文学の特色を考え、話し合ってみよう。

という三つの目標が設定されている。この単元も、現行では見られない特徴的な単元である。特に一、二に関しては久松潜一の文章から目標に沿って必要な情報を読み取り、一覧表を作るというユニークな活動であり、文学史を通史的に理解する上で効果的な活動であるといえる。現在では、『平成十年学習指導要領』「第二章各教科第一節国語 第二 各学年の目標及び内容」より「文学作品などの成立年代やその特徴などに触れる場合には、通史的に扱うことはしないこと。」という文言が追加され、通史的に学ぶことよりも、個々の作品についてより深く学ぶという方針に切り替わっている。

次に佐佐木信綱の『万葉百首選』から『万葉集』十首それぞれの鑑賞文が引用されている。以下、本文から引用する。

持統天皇 春過ぎて夏来るらし白たへの衣ほしたり天のかぐ

山 (巻一・二二八)

柿本人麻呂 ひむかしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみす
れば月かたぶきぬ (巻一・四八)

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしのに古おもほゆ (巻三・二六六)

天さがるひなの長道ゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ (巻三・二五五)

あしひきの山河の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る (巻七・一〇八八)

銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも (巻五・八〇三)

山部赤人 田児の浦ゆ打出でてみれば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける (巻三・三二八)

若の浦に潮満ち来れば濁を無み葦辺をさしてたづ鳴きわたる (巻六・九一九)

わが宿のいささむら竹吹く風のかそけきこの夕べかも (巻十九・四二九一)

大伴家持

小野 老 あをによし寧楽の都は咲く花の薫ふがごとく今さかりなり (巻三・三二八)

この単元には、

一 みんなで好きな歌を一首ずつ選んで、最も多く選ばれた歌から順番に、選んだ理由を述べ、話し合おう。

二 人麻呂、憶良、赤人、家持などについて、それぞれの作風の特徴を調べてみよう。

三 「あしひきの」と「若の浦に」との歌では、時間の推移は

どのようなとらえられているか、考えてみよう。

四 「春過ぎて」の歌と「田子の浦ゆ」の歌について、万葉集の原作と、古今集や百人一首の改作とを比べてみよう。そして、なぜ原作がよいか考えてみよう。

五 これらの歌では、どんな枕詞が使われているか。またその果たす役割についても考えてみよう。

六 万葉集の現代における意義を考えてみよう。

という六つの目標が設定されていた。二、三、四、五の目標のように作風の違いや和歌同士を比較するという観点が特徴的である。

また、四の「なぜ原作がよいか考えてみよう」という目標には、『万葉集』重視の考えが透けて見える。編者の和歌観が表れている部分である。

この単元では、鑑賞することに重点が置かれ、創作するということは目標に含まれていなかった。

学校図書の文学編では、三年上巻に「芭蕉名句」で俳句鑑賞、「短歌の作り方」、近代短歌を扱った「四季」という単元のあとに、佐佐木信綱の『万葉秀歌』が設定されている。

「芭蕉名句」では、松尾芭蕉の俳句が十二句取り上げられており、最初の四句には鑑賞文がそれぞれ付してある。ここでの単元目標は、

一 一句ごとに鑑賞の文を熟読し、その句の妙味がどういふ点にあるか考えよう。

二 第一、二学年の時に読んだ「俳句の作り方味わい方」を思い起こし、一々の句について、季題・切れ字などを調べよう。

三 終わりにあげた八句の鑑賞を文につづってみよう。

四 芭蕉の句にあらわれた日本の自然について調べよう。

五 芭蕉の伝記を調べ、その文学上の功績を考えてみよう。

の五つである。一・二の活動を通じて、鑑賞文を参考に自分の鑑賞文を考えると、作業の他に、四では俳句を通して「日本の自然」に目を向け、さらには五で、芭蕉自身の功績や文学上の役割について考えるという活動が設定されている。

国語編にはなかった「短歌の作り方」では、短歌の特色に関する解説に焦点を当てた内容になっており、例句などは引用されていなかった。単元目標としては、

一 この文で読みとったことをノートに整理しよう。

二 短歌の特色を明きらかにし、内容と形式との関係について調べよう。

三 「歌は調べなり」という言葉の意味を説明せよ。

四 余情とは何か。これは短歌にとってどんな意味をもつものか考えよう。

五 じっさいに短歌を作り、指導をうけ、また批評しあってみよう。

の五つが設定されている。短歌を読み味わうだけでなく、特色や

「余情」に焦点を当てているところが特徴である。

「四季」の単元では、解説や語注はなく、十三首から一首ずつの印象や好きな短歌を選ぶという活動にとどめていた。一方で、次の単元である『万葉秀歌』では、和歌十首と佐々木信綱の『万葉秀歌』から解説を引用していた。この単元の前文では、

万葉集の作者は、上は天皇・皇后・皇族をはじめ、下は宮女・僧侶・無名の市民・農民に及び、当時の貴賤男女を網羅して、社会の全階級にわたっている。芸術文化の上に差別的な態度をとらなかった上代の民主的な社会思想を知ることができる。今この集の中から特に代表的な歌十首を選んで解釈し鑑賞することとする。

という前文のもと、丁寧な解説文とともに和歌が並んでいる。以下、作品を本文から引用する。

山部赤人 田児の浦ゆ打出でてみれば真白にぞ不尽の高嶺に
雪はふりける (巻三・三二八)

大伴家持 春の苑くれなゐにほふ桃の花した照る道に出でた
つをとめ (巻十九・四一三九)

小野 老 あをによし寧楽の都は咲く花の薫ふがごとく今さ
かりなり (巻三・三三二八)

柿本人麻呂 ひむかしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみす
れば月かたぶきぬ (巻一・四八)

持統天皇 春過ぎて夏来るらし白たへの衣ほしたり天のかく

山 山 (巻一・二二八)

山上憶良 銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも

(巻五・八〇三)

中大兄皇子 渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清明くこそ

(巻一・一五)

高市黒人 いづくにか船泊すらむ安礼の崎こぎたみ行きし棚

無し小舟 (巻一・五八)

大伴家持 わが宿のいささむら竹吹く風のかそけきこの

夕べかも (巻十九・四二九一)

山部赤人 若の浦に潮満ち来れば濁を無み葦辺をさしてたづ

鳴きわたる (巻六・九一九)

この単元の目標は、

- 一 万葉集の特色はどういう点だろうか。
- 二 この十首の歌の中で、いちばん好きなのはどれか。
- 三 持統天皇の「春過ぎて」の歌と、山部赤人の「田子の浦ゆ」の歌が、後世、改作されて、新古今集や、百人一首におさめられているが、改作されたほうがよくないのは、どういうわけか考えてみよう。

となっており、現代にはない点は、一、三のように、『万葉集』の特色について考えたり、「改作された」という点に注目して作品を

比較するという活動があることである。

本文には改作された方の和歌は載っていないものの、言葉の調子や作品そのものを鑑賞することは別に、「なぜ改作されたのか」、「なぜ改作されたほうがよくないのか」という視点で考えることで、作品鑑賞の幅を広げられる活動が期待できる。

学校図書の言語編では、三年生の「文学の鑑賞」という単元に、木下利玄の短歌の鑑賞文が載っていた。十五の目標が設定されているなかで、「現代詩の形式や特質を理解し、詩の読み方・味わい方について話し合おう」や「古典が現代においていかなる価値をもっているか討議しよう」など、こちらも鑑賞文から定型詩の理解を深めることを中心にして、広く古典文学の意義について考えさせる目標設定がされている。創作に関する目標は見られず、あくまで言語編は鑑賞がメインとなっていることがわかった。

三省堂

三省堂では、三年の上巻では俳句の単元は見られたが、古典和歌を扱う単元は見られなかった。

三年上巻の「俳句読本」という単元では、高浜虚子が書いた評論文を引用しており、三つの小単元に分かれて俳句を学ぶ内容になっている。

一では、文学とは何かや、その中の一つである「俳句」に焦点を当てて、見開き六ページにわたって文学のあり方や俳句の決まりについて論を展開している。

その中で芭蕉の俳句を二句紹介しながら、「文学の中でも最も短い文学」と俳句を評し、季題から日本人の四季への見方などを詳しく述べている。

二では、一で述べられなかった俳句の作法（題詠・句会・吟行・写生）について説明しており、実際に生徒たちが俳句を読み発表できるような詳細さで書かれている。

三では、芭蕉にクローズアップして、作者や作品についてを時系列に沿って紹介している。

この単元での目標は、

- 一 芭蕉の句の季題を調べてごらん下さい。
- 二 「ほろ／＼とやまぶき散るか滝の音」の「か」は、どういう意味ですか。
- 三 「海くれて」の句を「滝くれてほのかに白しかもの声」としたらどうでしょう。
- 四 本文に説明のついていない句を解釈してごらん下さい。
- 五 どれか一句を選んで、絵にかいてごらん下さい。
- 六 みんなで、句会・吟行をしてみましょう。

の六つがあった。平成二十七年版と比較してみると、俳句に割くページ数が多く、内容も重厚である。平成二十七年版が「ひびきを味わう」ということに重点を置いていることに比べると、助詞の意味や改作した場合の変化について学習が及んでおり、五の「俳句を絵に表す」という活動に関しては、平成二十七年版までの教科書で

は、光村図書の中学二年生の教科書の『枕草子』の単元に見られる活動である。出版社は違うものの俳句や随筆から、「自分の感じたことを描き出す」という活動は今も形を変えて受け継がれていることが分かる。

教育出版

教育出版では、三年下巻に『万葉集』から十六首取り上げた古典和歌の単元はあった一方で、東京書籍や学校図書に見られた、短歌や俳句の作り方や、詩歌の特色を解説している単元は見られなかった。

三年下巻の『万葉集』を扱った単元では、「万葉集はいつの時代にも、後世からなつかしく顧みられる誇るべき歌集です。」という前文があり、この単元では現代語訳がしっかりと書かれていた。目標は二〇あったが、「おのおのの歌の調子を調べ」たり、「万葉集から、古代人の真情がすなおに現れている語句や、事実を正しくとらえている箇所を取り出して、詳しく調べ」る、「二年で習った短歌とこの万葉集とを比べ」てその作風の違いを話し合うなどがあった。

前文の「なつかしく顧みられるべき歌集」や目標設定などから、万葉集の特色である写実的な部分や素直な表現を、二年で習った短歌と比較させることで読みとらせようという意図を読み取ることができる。

和歌に関しては、

舒明天皇 夕されば小倉の山に鳴くしかは今宵は鳴かず寝ね

額田王

にけらしも (巻八・一五一一)
熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は
漕ぎいでな (巻一・一八)

天智天皇

わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜あきらけ
くこそ (巻一・一五)

柿本人麿

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月
傾きぬ (巻一・四八)

高市黒人

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ
思ほゆ (巻三・二六六)
いづくにか船泊すらむ安礼の崎漕ぎ回み行きし棚
無し小船 (巻一・五八)

志貴皇子

石ばしる垂水の上のさわらびに萌え出づる春にな
りにけるかも (巻八・一四一八)

山部赤人

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高くたふとき
駿河なる 富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れ
ば 渡る日の 影も隠ろひ 照る月の 光も見え
ず 白雲も い行きはばかり 時じくぞ 雪は降
りける 語りつき 言ひつぎゆかむ 富士の高嶺
は (巻二・三二七)

山上憶良

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ富士の高嶺
に雪はふりける (巻三・三二八)
憶良らは今はまからむ子泣くらむそのかの母も吾
を待つらむぞ (巻三・三三七)

大伴旅人

沫雪のほどろほどろにふりしけば奈良の京し思ほ

ゆるかも (巻八・一六三九)

大伴家持 わがやどのいささ群竹吹く風のかそけきこの

夕べかも (巻一九・四二九一)

商長首磨 忘れむと野行き山行き我来れど我が父母は忘れせ

ぬかも (巻二〇・四三四四)

遣唐使の母 旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽ぐくめ天の

鶴群 (巻九・一七九一)

信濃国の歌 信濃路は今の藝道刈株に足踏ましむな履はけ我が

背 (巻一四・三三九九)

作者不詳 法師らがひげの剃杭馬つなきいたくな引きそ法師

なからかむ (巻一六・三八四六)

以上の十六首が採録されている。平成二十七年版と比較すると、高市黒人、商長首磨、遣唐使の歌、作者不明の四首が平成二十七年版には見られない歌である。内容の傾向は、四季の歌というよりも、離別や家族への思いを詠んでいる和歌が多い。脚注や解説に作品や作者情報がついており、赤人の反歌と長歌との関連を考えさせる活動も設定されている。

平成二十七年版でも、長歌と反歌をセットで載せている出版社はあるが、目標に明確に長歌と反歌を比較することは書かれていない。また学校図書『国語編三年下巻』『万葉百首選』の単元目標「六 万葉集の現代における意義を考えてみよう」と同様に、『万葉集』を重視するような書き方がされており、『古今和歌集』や『新古今和歌集』よりも『万葉集』を尊重する編集の見方が反映されている。

光村図書

光村図書では、三年上巻のみ古典教材が見られた。内容は、『万葉集』から長歌含めて十二首取り上げられており、他の出版社との違いは、取り上げる長歌が多いことにある。以下、本文から引用する。

柿本人麻麿 やすみしし 吾大王の 聞し食す 天の下に 国

はしも さはにあれども 山川の 清き河内と

御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に

宮柱 太敷きませば 百磯城の 大宮人は 船竝

めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る この川の絶

ゆることなく この山の いや高知らず 水激る

滝の宮処は 見れど飽かぬかも (巻一・三二八)

(反歌)

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなく復

還り見む (巻一・三三七)

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月

傾きぬ (巻一・四八)

山部赤人 天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿

河なる 布士の高嶺を 天の原 ふり放け見れば

渡る日の 影も隠ろひ 照る月の 光も見えず

白雲も い行き憚り 時じくぞ 雪は降りける

語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

(卷三・三二七)

(反歌)

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺
に雪は零りける (卷三・三二八)

み吉野の象山の際の木末には幾許も騒ぐ鳥の声か
も (卷六・九二四)

山上憶良

瓜食めば 子供思ほゆ 粟食めば まして俵ばゆ
何処より来たりしものぞ 目交に もとな懸りて
安眠し寝さぬ (卷五・八〇二)

(反歌)

銀も黄金も玉も何せむにまされる宝子に及かめや
も (卷五・八〇三)

大伴家持

夏山の木末の繁にほととぎす鳴き響むなる声のは
るけさ (卷八・一四九四)

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば京の大路お
もほゆ (卷一九・四一四二)

ほととぎす鳴き羽触にも散りにけり盛過ぐらし藤
浪の花 (卷一九・四一九三)

高橋虫麻呂

春の日の 霞める時に 墨吉の 岸に出で居て
釣船のとをらふ見れば 古の事ぞ おもほゆる
水の江の 浦島の児が 堅魚釣り 鯛釣り矜り
七日まで 家にも来ずて 海界を 過ぎて榜ぎ行
くに わたつみの 神のをとめに たまさかに
いこぎむかひ 相とぶらひ 言成りしかば かき

結び 常よに至り わたつみの 神の宮の 内の
への たへなる殿に 携はり 二人入り居て 老
いもせず 死にもせずして 永き世に 有りける
ものを 世のなかの 愚人の 吾妹児に 告りて
語らく しましくは 家に帰りて 父母に 事も
告らひ 明日の如 吾は来なむと言ひければ 妹
がいへらく 常世べに 復かへり来て 今の如
あはむとならば 此篋 開くなゆめと そこらく
に 堅めし事を 墨吉に 還り来りて 家見れど
いへも見かねて 里見れど 里も見かねて 恠み
と そここにおもはく 家ゆ出で 三歳のほどに
墻も無く 家うせめやと 此篋を 開きて見てば
もとの如 家は有らむと 玉篋 すこし披くに
白雲の 箱より出でて 常世べに 棚引きぬれば
立ち走り 叫び袖振り こいまろび 足ずりしつ
つ たちまちに ころろ消失せぬ 若かりしは
だも皺みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは
いきさへ絶えて 後遂に 寿死にける 水の江の
浦島の子が 家どころ見ゆ (卷九・一七四〇)

(反歌)

常世辺に住むべきものを劔刀なが心からおぞやこ
の君 (卷九・一七四五)

内容を見ると、窪田空穂、佐佐木信綱、尾山篤二郎、谷馨、都築

省吾による解説文がそれぞれの和歌に付されているが、批評文のような内容になっているため中学生にとっては少し難解である。たとえば、山部赤人の長歌「天地の…」では、

手法は簡素で、淡雅であるが、富士の崇高雄大はよく描かれておる。(中略)富士の山そのものについては言わず、日・月・雲・雪によって、おのずから山の情景を浮かび上がらせた構想は非凡である。平明のなかに高いにおいのある赤人の歌風を代表したものであると共に、上代人の富士山に対する崇敬・讚歎の声をながく後の世につたえる作である。

というように山部赤人の歌風や、当時の富士山に対する考え方を述べていたり、大伴家持の「ほととぎす…」では、

上三句の細かい自然観照の態度は万葉中期以前には全く見られないもので、こうした繊細優美な感味は、いうところの万葉集の特色とは縁遠い。奈良朝盛期の万葉爛熟期の歌群と目される巻十の歌柄と傾向を同じゅうし、さらに古今集読み人しらずの作を思い出させるものである。

のように万葉集と古今和歌集を比較するような文章が見られる。単元目標には、

1 原文と評釈とを読み比べながら、どんなありさまや、心持

を歌ったものか、はつきりさせよう。

2 長歌・反歌・短歌の関係や特徴について考えてみよう。

3 釈訳によって、和歌を鑑賞する目のつけどころを学びとろう。

4 ここに掲げた作者の特徴を指摘してみよう。

5 これらを手がかりとして「万葉集」とはどんな本か、調べてみよう。

6 万葉集の価値やその調べ方について、みんなで話し合おう。

という六つだった。光村図書は他の出版社に比べると長歌を多く取り上げており、2に挙げられる長歌・反歌そのものに焦点を当てた活動目標は、平成二十七年版にはない視点であり、とても興味深いものである。

長歌と反歌をどのように取り上げてきたのかは、その間の時代も検証しなければわからないが、山部赤人の反歌「田子の浦ゆ…」の解説文に、

すべて反歌の場合は、長歌とむすびつけて考えねばならぬ。すなわち、前の長歌が、いずこからながめたとも、いずこで詠んだとも知りたいのを、この反歌によって備わったものと見るべきである。

とあるように、反歌のみ取り上げるのは、和歌の理解をするためには不十分であると考えられていたことがわかる。

また、先ほどの教育出版の三年下巻の内容と同じように、『万葉集』とはどういうものか、その価値や特徴を調べるといふ活動が想定されており、ここにも文学史的観点を取り入れようとする意図があるのではないかと考えられる。

光村図書館の言語編⁽²⁰⁾では、「古典の味わい方」といふ単元が設定されていた。

まず、今まで読んだ古典について挙げ、「古典とは何か」をみんなで話し合うという活動を行い、次に、「どんな古典を読んだらよいか」、「わかりにくい文章であったとき、どうしたよいか」というテーマで「古典の読み方」について話し合う活動を行う。

読み方について話し合いを行った後は、「日本の古典」として『万葉集』『源氏物語』『平家物語』『徒然草』『奥の細道』の五つを「味わっておきたい古典」として紹介し、

- (1) 万葉集のなかから、めい／＼が好きな一首を選んで、それについて感じたことを話し合おう。
- (2) 源氏物語の叙景の一節をぬき出して、それについて話し合おう。
- (3) 平家物語の中で、おもしろい段を読み、これを聞こう。
 - (イ) それについて、感じたことを話し合おう。
- (4) つれづれ草のどこか一、二段を読み、これを聞こう。
 - (イ) それについて感じたことを話し合おう。
- (5) 奥の細道の一節を読み、これを聞こう。

(イ) それについて、感じたことを話し合おう。

という活動を手分けして行う活動が設定されていた。作品の成立順に挙げられており、(1)に関しては、教科書に引用はないため、『万葉集』に収められた膨大な和歌の中から自分が好きな和歌を選ぶことになる。ある程度絞って提示することは必要かもしれないが、生徒は『万葉集』にはどのくらい和歌が収められているのかを、実際に自分で確かめ選ぶという活動もできる点が、他の古典和歌や『万葉集』を取り上げた単元には見られない特徴である。

四、まとめ―昭和二十四～二十八年と平成二十七年の教科書を比較して―

以上昭和二十四～二十八年の間に発行された中学一年から中学三年生までの教材内容をまとめると、二年生に、俳句や近代短歌、三年生に古典和歌が設定されていることは、現在にも受け継がれているが、内容や目標設定に大きな違いが見られた。

昭和二十四～二十八年の教科書では、単元を通して作品の時代背景や作者に関する情報を集めたり、俳句や短歌、和歌そのものを深く知る教材や単元を多く取り入れていた。また、日本文学史についてまとめるといった、文学史的観点に基づいた単元設定によって、作品理解とつなげようとしていたことも単元目標から読み取れる。

『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』のいわゆる「三大集」の扱いに関しては、昭和二十四～二十八年では多くの出版社で『万

『万葉集』に比重を置いた単元設定がされていることがわかる。『万葉集』に関しては、五社中四社が取り上げているのに対し、『古今和歌集』『新古今和歌集』は学校図書国語編の三年上巻でのみである。単元目標を見ても、『万葉集』に関する調べ学習を通して、『万葉集』で採られている和歌の特徴を学ばせようという視点が多く、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の三つを取り上げていた学校図書も、『万葉集』と『古今和歌集』『新古今和歌集』という対立を明確にした単元設定をしていた。

また、俳句の単元を見ても、わかりやすく簡潔に規則や成立を説明するというよりも、長文の解説や評論文を取り入れており、その内容は平成二十七年版と比較にならないほど密度の濃い内容である。平成二十七年版では解説文や評論文ではなく、決まりや規則などを簡潔にまとめた文章と「作品の音読・鑑賞」がメインである。

和歌、短歌も同様にして「短歌の作り方」などの創作する側の視点を持った単元が多く設定されている。先に述べた通り、解説文や評論文を載せることによって、内容は難解になっているものの、生徒が文章を読んで理解することを促すような丁寧な作りがされている。平成二十七年版の教科書では、採用作品の精選などで批評文を読ませる単元自体が数を減らしていったのではないかと考えられる。

一方で、丁寧な作りがされているといったものの、長文を理解し、必要な情報を読みとる力がない生徒にとっては、逆に短歌や俳句を難しく感じてしまう可能性も考えられる。その点では、現行のわかりやすく簡潔な説明が多くなっていることは、学力の底上げにつながる工夫とも考えることができる。

おわりに

今回の研究を通して、平成二十七年版のデータだけではわからなかった『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の扱い方の違いや、単元目標の変化を、読み取ることができた。

一方で、どのようなニーズによって『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』が現代に至るまでどのように扱い方が変化していったのか、俳句や短歌の作り方を丁寧に記した単元の減少理由などについても明らかにすることで、今後の古典和歌教育については古典全体の位置づけを捉え直す契機とすることができると考える。

【注】

- (1) 『国文学試論』第二十九号（大正大学大学院文学研究科国文学研究室／二〇二〇年三月）
- (2) 『国文学試論』第三十号（大正大学大学院文学研究科国文学研究室／二〇二一年三月）
- (3) 歌番号は、『新編国歌大観』に拠り、『万葉集』については旧国歌大観番号とした。
- (4) 『中等言語 一』（学校図書／一九五一年発行／一九五〇年検定 済）
- (5) 『新しい国語 中学二年上』（東京書籍／一九五一年六月発行／一九四九年十月検定済）
- (6) 『中学国語 二下』（学校図書／一九五三年発行／一九五二年検

- (7) 『中等文学 二上』(学校図書／一九五一年発行／一九五〇年検定済)
- (8) 『中等国語 二上』(三省堂／一九五〇年二月発行／一九四九年検定済)
- (9) 『中学国語(総合) 二の上』(教育出版／一九五三年十二月発行／一九五二年七月検定済)
- (10) 『新しい国語 中学二年以上』(東京書籍／一九五一年六月発行／一九五〇年八月検定済)
- (11) 『新しい国語 中学三年下』(東京書籍／一九五一年六月発行／一九五〇年八月検定済)
- (12) 『中学国語 三上』(学校図書／一九五三年発行／一九五二年検定済)
- (13) 『中学国語 三下』(学校図書／一九五三年発行／一九五二年検定済)
- (14) 『中等文学 三上』(学校図書／一九五一年発行／一九五〇年検定済)
- (15) 『中等言語 三』(学校図書／一九五一年発行／一九五〇年検定済)
- (16) 『中等国語 三上』(三省堂／一九五〇年二月発行／一九四九年検定済)
- (17) 『国語2』(光村図書／二〇一六年二月発行／二〇一五年三月検定済)
- (18) 『中学国語(総合) 三の下』(教育出版／一九五三年六月発行／一九五二年七月検定済)
- (19) 『中等新国語 文学編 三年上』(光村図書／一九五二年六月発行／一九五二年検定済)
- (20) 『中等新国語 言語編 三年』(光村図書／一九五二年六月発行／一九五二年検定済)